

僕が初めてアーク溶接をしたのは、実習の授業の時でした。ものづくりに触れているのだという感覚がその身に広がり、感情が高ぶったのを覚えています。僕が溶接コンクールに出場するきっかけになったのは、ものづくりに大きく関わる溶接に没頭したい、という欲求があったからです。溶接コンクールに出場する話を聞いてから、本番まで約2ヶ月。初心者の僕にとっては、とにかく時間がありませんでした。先輩や先生方に教えてもらいながら練習していき、自分の技術を埋めていきました。溶接というものは、「習うより慣れる」という感じなので、数をこなし、本番に備えました。僕自身、コンクールというものに出場した経験がなく、本番に近づくにつれ、不安と緊張で、何度逃げ出したいと思ったことか分かりません。そして本番、結果が出なかったらどうしよう、今までの練習が無駄になってしまったらどうしよう、と考えながらも、手に汗を握りながら自分が費やしてきた時間を信じて挑みました。肝心の結果は、高校生としては2位で、関東甲信越高校生溶接コンクールへの出場権を得ました。聞いたとき、こんな自分でも結果は出せるんだと思い、自信がついたのと同時に、とにかく嬉しかったです。関東甲信越高校生溶接コンクールまでの期間は約4ヶ月で、じっくりと対策を練られる時間がありました。前回の反省を踏まえて、悪い部分は良く、良い部分はより良く、と自分の技術を向上させていきました。やればやるほど成長している感覚を味わえる溶接は本当に楽しくて、無我夢中で打ち込みました。1位をもぎ取る思いで練習に挑み、迎えた本番。関東甲信越というスケールもあってか、その場の空気は別格でした。慣れない場所での溶接は異様な緊張感があり、僕が最も苦手とするものでした。競技中は不安しなくて、いつものような力は出せていなかったと思います。僕はそのことがとても悔しくて、何とも言えない気持ちになりました。結果は16位という惨敗の結果で幕を閉じました。数日間は周りの人たちの期待に応えられなかった自分の無力さに絶望していました。ただ、そんな僕にチャンスが訪れました。関東甲信越高校生溶接コンクールの結果から、都の代表として全国大会の話を頂きました。正直、結果も出せなかった自分が全国大会に出てもいいのか、という申し訳なさでいっぱいでしたが、せっかくの機会だったので、出場することを決心しました。全国大会の場所は愛媛県で、競技の課題も前回のコンクールとは違い、今までやったことのない方法での溶接でした。全体的な難易度は上がりましたが、それでも僕は結果を出すことに集中し、挑みました。前回の経験もあり、緊張はなく、自分の持っているすべての技術を出し切りました。それでも入賞することは出来ず、とうとう自分の願いは叶いませんでした。全国レベルはこんなにも違うのか、と実感しその圧倒的スケールに感服しました。自分の力がどれだけ小さいのかを思い知らされましたが、それでも後悔という気持ちはほとんどありませんでした。自分のすべての力を出し切れたので、終わり方としてはいい終わり方だったと思います。僕は溶接を通して、かけがえのないものを学びました。それは技術の大切さです。これがきっかけで、ものづくりについてより深く知識を深めることができました。それに溶接を通して、様々な人たちとも出会えました。正直、こんな素晴らしい体験は、2度とできないと思います。そのこと自体にとっても感謝しているし、この経験は僕の宝物です。僕はこの宝物を胸にこれから立ち上がる壁にぶつかっていかうと思います。12月に東京都若手人材育成溶接コンクールが控えているので、結果が出せなかった屈辱を、その大会でぶつけて、今度こそ結果を出せるように、最後の最後まで力を振り絞って、抗おうと思います。これが僕の溶接にかける覚悟です。